

遊魚釣樂

【ゆうぎょちようらく】



ヤマメ・イワナ・アユ etc

とかく釣りは楽しい*

木崎勝年



游魚釣樂

木
崎
勝
年

目次

はじめに

埼玉県

名栗川（入間川）のアユ、ヤマメ、イワナ……………5

名栗川と入間川の河川名を考証……………14

入間川起点標識から東京湾まで歩く……………16

秩父荒川のアユ……………17

奥秩父溪流群のヤマメ、イワナ……………23

群馬県

神流川のアユ、ヤマメ、イワナ……………37

利根川本流のアユ……………44

吾妻川と烏川のアユ……………47

湯檜曾川のヤマメ、イワナ……………50

栃木県

思川（小倉川）、大芦川、西大芦川、粕尾川のアユ、ヤマメ……………56

思川（小倉川）のアユ……………56

大芦川のアユ……………57

	西大芦川のアユ	58
	粕尾川のアユ	60
	鬼怒川のアユ	63
	那珂川のアユ、サケ	68
	那珂川では、小さいサケをジャリッコと呼ぶ	69
茨城県	那珂川のアユ	74
	大北川のヤマメ	75
	熊川のアユ	77
福島県	伊南川のアユ	79
	会津大川のアユ	84
	福島久慈川のアユ	88
	摺上川のアユ	89
宮城県	白石川のアユ	93
岩手県	気仙川のアユ	96
	閉伊川のアユ	103
北海道	網走のサケ	107

秋田県
斜里川のオシヨロコマとヤマベ……………120
米代川のアユ……………126

阿仁川のアユ……………133
桧木内川、玉川のアユ……………142

子吉川のアユ……………146
皆瀬川のアユ……………149

山形県
鮭川のアユ……………153

最上小国川のアユ……………161
日向川、支流荒瀬川のアユ……………165

赤川のアユ……………171
温海川、庄内小国川、鼠ヶ関川のアユ、ヤマメ、ヒカリ、イワナ、アメマス等々……………175

新潟県
三面川のアユ、サケ……………178

越後荒川のアユ……………181
五十嵐川のアユ……………182

片貝川ほか、有間川（桑取川）のヤマメ、イワナ……………184
釜川のヤマメ、イワナ……………190

	能生川のアユ	194
	魚野川のアユ	204
長野県	千曲川溪流群のヤマメ、イワナ	206
	千曲川の佐久、上小、更埴のアユ	208
	木曾川のアユ	212
	島々谷川のイワナ	214
	天竜川のアユ	216
岐阜県	馬瀬川上流のアユ	218
	長良川のアユ	220
静岡県	浜松天竜川のアユ	224
	藁科川のアユ	225
	興津川のアユ	226
	静岡富士川のアユ	232
	狩野川のアユ、ヤマメ	236
山梨県	富士川のアユ、サツキマス	242
	釜無川、塩川のアユ	247

佐野川のヤマメ……………	249
丹波川のアマゴ、ヤマメ、イワナ……………	251
泉水谷のヤマメ、イワナ……………	253
後山川のヤマメ、イワナ……………	254
道志川のアユ、ヤマメ、イワナ……………	255
桂川のアユ、ヤマメ……………	256
酒匂川のアユ……………	257
相模川のアユ……………	259
中津川のアユ……………	262
奥多摩川のアユ……………	266
水根沢谷のヤマメ……………	267

神奈川県

東京都

あとがき

はじめて

真夏のある日、自宅裏の名栗川でギターを弾いていると、菅笠を被り、上下が黒っぽい綿のシャツやタイツを着て、長い竹竿を持ってやってきたおじさんがいた。そして、生きているサカナを付けて釣り始めたのである。わざわざサカナを付けて釣るなんて、変な釣りをする人もいるんだなあ、と思ったのは高校生の頃だった。

おじさんは、そのうちスースーと下流へ下り、糸を手繰り寄せて、腰から玉編みを抜き二尾を掬った。しゃがみ込んで玉編みの中に両手を入れ、根知故知してから一尾は流れに浮かべている木製の箱に入れ、またサカナの流れに放った。同じことを何回も繰り返し、やがて下流へ行ってしまう。

その釣りは、「アユの友釣り」だと知り、それをしていたのは当時の入間漁協組合長をしていた高橋満さんだとわかった。今でも鮮明に覚えているが、余りにも強烈なインパクトを与えてくれた釣りだった。

それから十三年後に友釣りを始めた。

だから、今でも（故）高橋さんは私の友釣りの「イメージ師匠」なのである。

そして、名栗川と奥多摩摩川へ友釣りに通い始めた。

そのコンセプトは、「小さな川」と「大きな川」がこなせれば、何処へ行ってもそれなりの友釣りができる筈と思っただからである。

そうこうしているうちに、釣り革命が起きた。

竹竿からグラスロッドに変わり、軽くて長くなった。その七・二メートルが発売された時は、小躍りして喜びすぐに買い求めた。その竿で奥多摩川や秩父荒川を釣りまくった。

グラスロッドの誕生だけでも凄かったのに、さらに軽くて長く、そして堅牢なカーボンロッドが誕生した。そのため長さは今や九メートルが主流である。竿の調子も増え、好きなバランスの竿が選べる時代となった。

当然溪流竿も同じ道を辿った。

さらに仕掛けも変わってきた。ナイロン糸から金属ラインやキンクしない複合繊維のラインが主流となった。ハリや鼻環、目印等さえ変わった。

だから飛躍的に釣果が増していい筈なのに、そうではないのである。

近年における魚属を取り巻く環境は、非常に厳しいものがある。

その一つに「アユの冷水病」があげられる。冷水病菌はアメリカからの輸入菌であり、徳島県で発症してから、もう二十年も経過した。その先進国のアメリカでさえ撲滅できないのである。

これに追い打ちをかけているのが、川鵜カウやバス類などによる食害である。これも全国的な現象であり、自然の生態系のことだとばかり言ってはられない。漁協や養鮎業者ようねん、養殖業者等の死活問題なのである。

冷水病の一つの要因として、除草剤や合成洗剤ではないかとも言われている。何れも「界面活性剤」が含まれているからである。これについては本文の富士川ふじがわのところで述べたい。

魚族にとつての環境変化はこれだけではない。大地震等の発生による土砂災害、河川工事、ゲリラ豪雨、酸性雨、ダム湖の出現、魚道不整備、河岸林の繁茂、産卵・孵化率の低下、乱獲等々、考えられる要因は枚挙に暇がないほどである。

溪流魚のヤマメやイワナは、大分以前から全国の漁協や関係団体等による発眼卵や稚魚、成魚の放流事業が実施されてきた。これも溪流魚の養殖事業が完成したお陰である。放流ヤマメなども自然産卵する個体も出現してきた。

さて、本書は私が釣行した河川等について、何十年間も記録してきたものの中から一部をまとめたものである。近くても遠くても紙面の都合で載せない川もある。何れにしても独断と偏見によるものだから、その点をご承知いただきたい

近年、「平成の大合併」が進み、合併した自治体が大変多い。そのため市町村名がまったく代わってしまったところもあり、馴染むまで大変である。できるだけ新旧自治体名を併用し、分か

り易くした。その資料については、総務省の二〇〇八年（平成二十年）十一月一日までの予定と実績に従った。

埼玉県

名栗川（入間川）のアユ、ヤマメ、イワナ

清流「名栗川」の正式な河川名は「入間川」である。だが、小さい頃から名栗川と呼んで親しんできたので、お許しをいただきたい。

入間川は、入間漁協（古島照夫代表理事組合長）が管理している。アユの友釣り解禁日は、毎年六月の第二土曜日である。

いつも名栗川地の何処かでやるのだが、駐車場があるところが安心なため、ここ数年は「サツキ駐車場」を利用してゐる。オトリはすぐ上の名栗川橋の袂にある塩野オトリ店から買ってくる。その塩野誠さんとは、入間漁協や飯能釣友会でも一緒だし、そのうえ釣友の新井博さんの親戚なのである。

名栗川の友釣り解禁日は、徹夜するのが昔からの習わしになっている。その解禁で初めてブルーシートでテントを作ったのは、名栗の小沢地内で、その時は土屋保さんと新井茂さんとの三人であった。このテントは大変簡単に作れ、その後あちこちの友釣りで使ってきた。これは拙著『釣れ釣れ草』（一九九八年発行）の鮎の友釣りの章「名栗川」で書いているので省略する。

友釣りの話をしていると時間が経つのが早い。黎明を迎えたが、すぐには始めなかった。と言

うのは、数日前の降雨で有間川は二メートルも増水したし、本流の名郷地内でも一メートルも増水し、有間ダムの放流も手伝って低温すぎたためである。水温が二度上がったので、七時過ぎから開始した。トップは私、すぐ下に松ちゃん(松澤利文さん)、その下に新井ひろつつあんが入った。この前後は放流してないので、入釣者も少なかった。

「師匠っ、数が伸びないサナ」

「松ちゃん、この上下流は放流しないので魚影が薄いんだよ。しかも水温が低いので、追いが今一なんだな」

ひろつつあんも苦戦しながらポチポチ掛けていた。正味二時間ほど釣り九尾であった。魚体は綺麗で最大は十八センチ、アベレージサイズが十六センチだったが、中には最初に放流した稚魚そのものが混じった。

午後は原市場支部内の監視と情報収集に歩いた。オトリ屋の白石園(しろいし)に立ち寄って聴くと、オトリも釣り券もまあまあ売れたと言っていた。ドブ淵の前後では正午時点で十七尾、夕方までやって三十四尾だと話してくれた。また、親子で今年初めて名栗川の年券を買い、友釣りをしたが、二人併せて四十尾ほど釣り、

「こんな綺麗な川で、こんなに沢山釣れるとは、今まで知りませんでした」
と言いながら、友缶を開けて見せてくれた。

「どちらから来てくれたんですか？」

「青梅市からです」

「それでは近いのだからちよくちよく来てくださいよ」

「そうですね、またすぎます」

と仰つてくれた。嬉しい限りである。

漁協本部に詰めている古島組合長や平沼副組合長兼放流委員長に携帯電話で報告した。

今は携帯電話時代だから情報が素早く伝達できる。塩野オトリ店のある名栗川橋は、午前中で四十尾アップ、また、上流の有間橋下流でも午前中で六十尾アップと絶好調が伝えられていた。

アユが放流されて最初にハム珪藻けいそうは、春までに発生した「一番珪藻」である。それをハンでしまうと、次の「二番珪藻」が発生する。この二番珪藻こそがアユにとっての「成長珪藻」なのである。つまり珪藻の種類が違うのである。

人間の赤ちゃんで言えば、生まれたてはママのおっぱいやミルクで育ち、離乳食となり、やがて大人と同じ様な食事となるのである。それと同じで、陽当たりの良い二番珪藻でないと、アユは成長しなかつたりボスアユのもとに集団で移動してしまふのである。勿論、水温も関係するが。

河岸林を整備し、「陽の当たる川づくり」が喫緊の課題と思われた。

名栗川筋はヤマメが適している川である。その理由は、雨量が多く、稚魚を育む支流もそれなりにあり、本流へ供給しているからである。特に、私よりもずっと年配者に聴くと、「昔の有間が懐かしい。ヤマメは切り無く釣れたもんだよ」と古を懐かしむ。私の時代では、八寸もあれば小躍りしたもので、大きくても七寸クラスがアベレージサイズであった。また、多くの先輩達が水量が無くなったと嘆いておられた。保水力のない林相になったためかも知れない。これを回復するためには、林相を替え、落ち葉が堆積する山にすれば保水力が増すものと思われるが、それについてはそのほうの学者や専門家に登場願うしかない。

熊谷地方気象台の観測資料によれば、埼玉県最大の多雨地帯は、有間山や秩父の浦山なのである。逆に最西端である大滝村（現秩父市）の中津川方面の方が雨量は多いのではないかと思っている人もいるようだが、そんなことはない。こちらは雨量も少ないうえ、すぐに流れ去ってしまう地層なのである。

モーターゼーションの時代がくるまでは、河又でバスを降り、有間川沿いをてくてく歩いたものだ。小さな発電所の建物や送水管などがあつた。また、その近くの川中からは、黒い塩ビパイプが突き出ている。パイプから常に水が溢れ出ている。この水は、「ラジウム鉱泉」ではないかと言われていた。さらに林道を歩いて行くと、右岸に白谷沢川（しちやま）が流入する。

この白谷沢川へは、秋口から始まるヤマメの産卵を良く見に行つたものである。産卵するヤ

マメは、概ね三年魚（二歳魚）からであるが、エサの絶対量やサカナの密度等により違ってくる。成長によっては、早くなったり、遅くなったりもする。そして、同じ川のサカナであるサケやカラフトマスと違い、産卵しても雌雄ともに死なない。寿命は概ね五年から八年ほどと言われている。氷河期にランドロックされ生き続けてきた水棲動物だから、それなりに生命力がある。

知人が、「このヤマメは何年魚だと思いますか」と、目の前に七、八尾差し出した。尺物のヤマメで綺麗な魚体であった。普通ならエサの豊富な溪流でも三、四年はかかろう。だが、わからないと言うと、

「ある堰堤下にヤマメの仔魚を入れてオキアミを毎日与えたそうので、これで一歳魚だそうですよ」
そう言われて魂消たまげてしまった。ただし、身肉は臭いと言っていた。

白谷沢川の出合いに有間ダムが完成した。

有間ダムは、一九七九年（昭和五十四年）十二月に本体工事に着手し、一九八六年（昭和六十年）三月に完成したロックフィルダムで、総貯水容量は七百六十万立方メートルである。

参考までに述べると、ダムの型式は三種類に分類される。重力式コンクリートダム、アーチ式コンクリートダム、そしてフィルダムである。そのうちフィルダムは二種類に分かれる。ロックフィルダムとアースダムである。ロックフィルダムはコア部分を土で盛って遮水しその上を岩石で積み重ねたもので、アースダムは土を積み上げたものである。

有間ダムのバックウオーターから林道を進むと、逆川入川さかがわいりが左岸へ流入する。ここは落合と呼ばれるところで、「有間溪谷観光釣り場」がある。周年ヤマメ、イワナ、ニジマスを釣らせているので、多くの釣り客が訪れている。

さらに上流へ釣り上がると、やがて『新編武蔵風土記稿』（新記）に登場する「有馬淵」（有馬の大淵）を迎える。

新記によれば、

有馬淵は有馬川の谷間にあり、人里離れて行くこと数里、有馬川の流れに沿い、兩岸をあちらこちらに渡り、巨石が並ぶところを通り、または道なきところへは丸太を藤でつなぎ、棧道さんどうの如くして渡り、または川を離れて小高きところへ登り、また下を行けば巨石の中断した所より落ちる滝がある。その一つは三尺ばかり落ちて淵となり、その一つは五尺ばかり落ちて淵となつてゐる。上の淵は三間四方もあり、下の淵は五間四方もあるだろう。土地の人はこれを夫婦淵と呼ぶ。これより西へ十町ほど難所を渡つて大淵に至る。さて、この淵より奥へ入り、一里半ばかりのところにて二丈余りの滝有り、これを滝口と呼ぶ。それより一条の水路が谷の間を曲折してここに注げば、無数の谷間より湧出する細流、各所よりこの水路に交接するゆえ、かかるこの大淵の辺りに至つては、水勢さらに強く、盤岩うがを穿つて七、八尺ばかりの飛瀑となり、響きを広い谷に伝えて雷鳴の如く、あるいは飛沫を吐く。あるいは霧を生じ、激怒してこの淵に注ぎ落ちれば、水

は自ら碧色を含んで広く遠き貌^{かほ}たり。方量は八、九間四方あるようだが、その底は量ることができないほどである。これを有馬の大淵といい、あるいは有馬の池とも呼ぶ。この辺りの景勝を言え、怪岩巨石が競い合い、杉檜雑木が森々と立ち茂り、もつとも物凄き有様なり。

(前述した部分は、飯能市役所で市史編纂室長や教育次長を勤め、現在飯能郷土史研究会に所属され、『飯能の幕末』や『西川林業史』などを始めとした多くの書物を発刊されている浅見徳男氏にご協力をいただいた。)

現在の「有馬の大淵」には、いくつかの巨石や杉や雑木の大木があり、辛うじて往時の面影が偲ばれる程度である。

このような状況になった要因は、相次ぐ台風などに起因するものと思われるが、一方では上下流に造られたいくつもの大堰堤の影響があるのかも知れない。

新記には、さらに次のように書かれている。

伝えによれば、この淵には龍神が住んでいて霊淵^{れいえん}という。不思議なことがあることを土地の人が話した。この日もすでに淵の別当龍穩寺^{りゆうゑんじ}(越生町)より修行中の僧を出して、側の行^{ぎやう}をする建物で読経し釈尊の血脈^{けつみやく}(系図)を投げたら、にわかに水面に渦ができて、中央より水底に沈んで行った。さすが龍神の感応なるを示した。ここに雨乞いをすれば、いかなる干天の年でも雨の降らないことはないといって、近くの郷村は言うに及ばず、遠くは十里いや二十里、三十里も離れ

ていても、聞き伝え聞き伝えして尋ねてきて、かの龍泉寺（旧名栗村河又）にきて、雨乞祭の読経を請いもとめるもの、干天の年には日々絶え間なしという。もつともその不思議あれば、人々恐怖して崇敬すること、他に異なるという。

また、名栗村史によれば、越生町の龍穩寺の龍が有間山に飛んで有馬の大淵を造ったとあり、雨乞いはその後、河又の龍泉寺で昭和三十九年まで行われた記録があるそうだ。また、行をしてきた建物（庵）は、明治四十三年の台風による大洪水で流失し、現在は安永六年（一七七七年）建立の龍神宮碑が建っている。

ここにある観光看板には、「龍神測」と表示されている。

有間川本谷は、左岸に滝の入り川を迎える。小滝場や堰堤を越え、先に進むと左岸に栃の木入川が出合う。当時は林道がこの少し先の埼玉県造林小屋で終点となっていた。

河川名で「入」と言うのは、主に奥武蔵地域の方言である。

有間川は、当時はヤマメだけしか生息していなかった。今もそうだと思うが。

ヤマメの愛称は「溪流の女王」と呼ばれ、イワナは「水の妖精」とか「山ドジョウ」と呼ばれる。温帯性ヤマメと呼ばれるアマゴは、愛称とは言えないが「雨子」とか「アメノウオ」と呼ばれる。雨が降ると良く釣れるからだという。

当時のヤマメ釣りのエサは、春先ならば「カジカの卵」を使った。カジカの卵は裏の名栗川で

採り、軽く塩水に浸けて陰干しにし、冷蔵庫に入れておく。使う時は水に浸けて柔らかくし、そのままハリに付けると落ちてしまうので、真綿を絡めて落ちないようにした。

また、冬の間に採ったブドウ虫も良く使った。このブドウ虫は、「エビヅルムシカシバガ」という蛾の幼虫で、山葡萄^{ヤマブドウ}の蔓に産み付けられたもので、その部分が膨らんでいるからすぐわかる。百本も二百本も取ってきてミルク缶の中に入れて冷蔵庫で保存し、使う分だけ出して持つていく。今は養殖のニューブドウ虫が主流となっている。トウモロコシやヨモギにいる虫も良いエサとなった。早期はそれらで十分だが、盛期になるともっぱら川虫を使う。川虫のなかではピンチヨロが一番で、次はスナムシである。オニチヨロやクロカワムシは有間川での食いは良くない。

その他には、イクラ、柳虫、蜂の子、白サシ、コオロギ、アキアカネ、クモなども使ってきた。降雨で溪流が濁るとキチが良い。キチとはミミズのこと、それも二種類いる。庭や畑やゴミ捨て場などにいるヤツはピンピンしたキチで、これを「ピンピン」と呼ぶ人もいる。鉛筆大にもなると「ドバビン」とも呼びウナギやギンギョ（学名はギギ）釣りに使った。切っても黄色い血は出ない。黄色い血が出るキチは、ウシやブタやニワトリなどの糞などに沸くもので、市販されているのがこれである。これは切ると黄色い血のような液が出る。これから「黄色い血」↓「黄^キ血」と名付けられた。イワナ釣りには絶好のエサだと釣友たちは言う。だが、馴染めないの、余り使わない。

名栗川と入間川の河川名を考証

ある本に「岩根橋を境として下流を入間川、上流を名栗川と呼んでいる」と書かれてあった。そこで調べてみることにした。

河川は「河川法」に基づいて水系指定され、その水系に流入する河川の上流端（最源流部）から下流端（水系指定された合流点まで）までの区間が指定されている。

その河川法は、明治二十九年法律第七十一号で定められ、そして現在の河川法は昭和三十九年七月十日法律第六十七号で全部改正され、同法第四条第一項の水系を指定する政令（昭和四十年三月二十四日政令第四十三号）が公布され、同年四月一日から施行されたものである。

これにより名栗川は、荒川水系第二十九番目の一級河川「入間川」として指定されている。

入間川の上流端は、左岸は飯能市大字上名栗字東山中千九百八十一番地先で、右岸は字西山中二千四十六番地のイ地先となっている。分かり易くいうと、飯能市名郷地内「山中沢川」の山中堰堤脇に「一級河川入間川」という起点標があり、ここから荒川合流点までである。流路延長は六十七・四キロとなっている。

さて、新記には次のように書かれている。

郡の東南を流れる水源に二流あり。一つは上名栗のうち妻坂峠の谷より注ぎ出で巽の方へ流ること水路四里ばかりで下名栗の川股に至る。もう一つは下名栗村の西、有馬山の奥の御林山（江

戸幕府直轄の山林)の谷間より注ぎ出でて東流す。これを有馬川と言ひ、三里ばかりを経て、村内川股にて名栗川に入り一流となる。高麗郡赤沢村に入り、川幅三、四間(一間は約一・八メートル)、平水八、九寸(一寸は約三センチ)で下流は『入間川』となる。

これによれば旧名栗村地内では「名栗川」と呼んでいたことになる。

さらに新記を見ていくと、正保年中改訂図(一六四四年から一六四七年頃)のものと、元禄年中改訂図(一六八八年から一七〇三年頃)がある。正保年中改訂図には赤沢村は載っていないが、元禄年中改訂図には赤沢村が載っている。これには入間川の説明がある。

水源は秩父郡のうち二カ所より出、その一つは名栗の妻坂峠の下より出で、その一つは有馬山の北なる谷間より出づ。そのあまり所々より小流出て、同郡名栗川俣(かわまた)にて合し、名栗川と言ひ、東流すること一里ばかりにして、本郡の西辺の赤沢村に入る。これより入間川の唱えあり、あるいは本郡落合村辺りより西よりを名栗川と言ひ、または入間川の川上とも言う。

新記は、江戸時代に幕府の大学頭の林述斎(はやしじゅっさい)を総裁に四十数人がこの編纂に従事し、幕府へは天保元年(一八三〇年)に献上された。奈良時代にも勅撰によつて風土記が編纂されていることから「新編」と表記された。

結局、各村からの明細帳と地誌御調書を基にして、古文書や古い記録類を集めて編纂されたが、河川名については各村の意見がまちまちであった。

つまり、「名栗川」は赤沢村から上流の下名栗村と上名栗村だということ、落合地内で成木川が合流する地点から上流とする各村からの調書が提出された。そのため、新記編纂事務局でも統一した見解が出せず、各村の意見を尊重し、両論併記としたのではないだろうか。

何れにしても、江戸時代には「名栗川」という名前は存在していたのである。では、いつの時点で「入間川」となったのか。推察すれば、明治二十九年の河川法制定の時か、昭和三十九年の河川法全部改正のどちらかであろう。国会図書館へ行って明治の河川法等を調べればわかる筈である。

入間川起点標識から東京湾まで歩く

山中沢川の一級河川入間川起点標識から東京湾までの距離を地図上で測ると、およそ百十二・八キロ。これを参考にして歩き出した。

入間川起点標識から荒川合流点までは、流路延長は先ほども触れたが六十七・四キロとなつてゐる。荒川合流点から東京湾までは四十四・五キロの標識が立っていた。合わせて百十一・九キロとなり、私が地図で測つた距離との差は〇・九キロと大差はない。

歩いた方法は、起点標識から林道や市道や県道を、入間市からは入間川に沿って造られている遊歩道（堤防道）を使った。川越から先は半日で往復できるだけ歩く。また、夏場は暑くて歩け